玉条集

佐々木清水

013572-000-1

特23-527

玉条集

佐々木　清水／著

M42

ABA-0039

特23
527

2B-80

宣言

神學の修養は、智識を啓き、德行を修め、慈善の心を益し、剛毅の力を養ひ、有用の才を生じ、民生の福祉を增し、邦國の影象を能する以所の者なり。抑も我が神は世俗の符標若くは言語にて信仰を表示するが如き者に非ず。宇宙の妙機に對する人の靈活なる關係に就て、實地に信仰し、實地に服膺し、明確に識認し、是を以て世界萬般の標準と定むる者即是なり。斯の道は、實に我が日本の神隨にして、子孫民生の遵守すへき所、倫理の哲、人道の典範、是を古今に通して不謬、又內外に施して不悖、我が兄弟姉妹の宜しく拳々服膺して世々是が神德を一つにせられんとを冀ふ矣

明治四十二年秋九月中院

佐々木清水謹白

明治
40 11 16
内務

玉條集 全

佐々木清水謹述

第壹章 宇宙の神髓

一條 宇宙の妙躰は眞理の本源なり。

二條 數理的に起り唯理に歸する者是を眞理と謂ふ。

三條 言語を以て表示する者實は非眞理なり。

四條 宇宙の秘奥は玄妙無爲神秘幽言の裡に存在する所の妙躰を謂ふ

五條　㊀的虛無は一個の活靈と成りて二個に陰陽を分成す。陰陽は分れて四象と成り以て空間を成立す。空間は四象を受けて又四の水火木金土風空行に分成す。今斯の八大元素に各四種の働きあり、四八三十二の諸元素の信合に依りて人は始めて父母の合性に倍ひ、合算三千四元素の綜合を以て人躰を斯の世に産出するに到る是を人生と謂ふ。

六條　陰陽に氣の信合する者是を宇宙の清氣と謂ふ。氣の清き者は神と成りて萬物を化育する者あり。

七條　宇宙の森羅萬象皆斯の靈偉の妙用に依らさる者莫し。斯の故に主宰の神あり。又分掌に神あり。今其本源に逆れは即一神教と成り、

其妙用を分ては即汎神教と成るなり。

八條　萬物は神の支配を受け互に相信合して四季に循環し以て一年に曆を爲す。

九條　物質は總て是を假和合と謂ふ。斯の合因は過去の原因に依て現在を造り又未來に果報を傳ふる者是を循環の定理と謂ふ。

十條　假和合は總て變化の動躰を謂ふ。

十一條　假和合は總て神の支配する所なり。

十二條　神の支配は誠なる者なり。誠は物の始終にて天地の本源なり誠は天の道なり。是を誠にするは人の道なり。是を天理人道と謂ふ。

十三條　誠は神の妙躰にして宇宙の大靈なり。

十四條　宇宙の大靈は地球上に散布して小靈と成る者なり。

十五條　小靈は物質を造りて萬物の形躰に宿れるなり。

十六條　靈は人間鳥畜草木の類又一なり。雖然、生物多くは天賦の智能と自然の教育に依りて自ら賢愚の別あるなり。

十七條　精靈の萬物を信合したる作用に依りて發達したる教育的進化の至情程腐敗に陷り易き者莫し。情は未なり。性は根本なり。故に情は煩惱となり。性は善となるなり。

十八條　文明の毒深き世の姿―癲の艶美―刀を抜くにも涙禁ぜず。情

の醜、靈の潔、森羅萬象自然に明瞭なり。

十九條　至淨なる宇宙の妙躰は物　の本源にして無始無終の者なり。

二十條　萬機の本源たる宇宙の妙　は造物無盡還して終焉てふ者は絶對に皆無なり。

第貳章　神の妙躰

廿一條　神の實　は萬物に隱蔽せられて吾人の直視する能はさる不可思議の妙　なり。

廿二條　神は宛然蜘蛛が糸を吐き其身　を蔽ふかの如く最大元素より糸を吐き萬物の裡に隱くれ、又瀰漫して萬物と成れり。

廿三條　自然萬物は泡沫的の存在にして唯宇宙の力を有する神の幻術を行を行ふ間の存在なり。

廿四條　神の實躰は宇宙の本躰にして現象は其一面なり。

廿五條　今是を簡單に辨別すれば實躰は均一無差別にして現象は差別的なり。

廿六條　本躰と現象とは元々同躰不離の者にして唯一物を二面より見たる者のみ。

廿七條　此神は我等の肉眼に現はれ且一定の場所に安置も給ふ神には非さるなり。

廿八條　天地間に存在して萬物と偕にあり。全世界一として神の存せさる所莫きなり。

廿九條　己の心に神性を感受し神魂歸善の道を明かにするは人生唯一の修德なり。

三十條　神性の感受とは罪惡沃行を洗條して神明賦與の本性に歸納する者を謂ふ。

卅一條　神に對して毎日の罪惡を謝する者は心根に善性を求むる者なり。

卅二條　己れの精心に神性を感受せんとを翼ふ者は神の妙法に隨ひ是

を修養實行する時は眞的信仰の結果に於て始めて自己の精心は天地と同化して神の妙躰に妙合一致する事を護らるゝなり。是を神通悟道の活法と謂ふ。

卅三條　以上の箇條を感じ來れば人は必ず神を崇拜せざるべからざるの意義又明瞭なる可し。

卅四條　人は此神に禮拜を施すべきか且一心を信賴すべきか曰く然り

卅五條　人は神に對して忘る可らざる者二つあり。祈禱と懺悔即是なり。

卅六條　祈禱とは齋戒沐浴して恭敬謹愼の正意を表示する者を謂ふ。

卅七條　思稔せよ、己れの行ひを沃して神に禮拜を施す勿れ。

卅八條　神は常に善人に與みすと示し給ふ。

卅九條　神の助力を護さる者は正心未た足らさる者と思念せよ。

四十條　眞人は常に神と偕に有る事を信し、恭謙に、謹直に、快活に心を持せは我か居る所は神の宮殿なり。

四十一條　我か兄弟姉妹は常に博愛なれ、潔誠なれ、義務を果せ、健全なれ、勉强なれ、勤儉なれ、素朴なれ、正しかれ。

四十二條　祈禱なる者は大別して口禱又は念禱の二種と爲す。

四十三條　口禱とは聖賢の作りたる讃文を念して願望を健つる者を謂

ふ。

四十四條　念禱とは默念して感謝の正意を表示する者と靜默の禮拜と謂ふ。

四十五條　禮拜は心の誠を盟ふ所の標準なり。

四十六條　誠を顯す者は心を明かにする者なり。

四十七條　心清からされは道を見る事能はす。

四十八條　道に明かなる者は溫雅柔順にして克其道を得る者なり。

四十九條　溫和なる言語は人をして信仰の念を起さしむる者なり。

五十條　信仰は智識の啓めにして安心の基なり。

五十一條　信仰は萬異を以て一致するに足ら可きなり。

五十二條　信仰は人間萬事の本源なり。

五十三條　信仰は心に誠あるなり誠あれば善行に現るなり。

五十四條　信仰に深き者をして世人は是を迷信と謂ふ。

五十五條　世に迷信莫し行者の眼には眞行と見る不信者の眼には迷信と見ゆるなり。

第四章　靈魂

五十六條　莞爾として笑みを含む者、勃然として怒を發し、勃然として怒を發する者又愁然として泣く心情の妙なるを、忽ち陽に、忽ち陰

に、漠くか如く、沈むに似たり。

五十七條　神は人に靈魂を與へて形躰と相關して生活を營しむれ雖又是を奪ひて形躰と分離せしむるなり。

五十八條　神は人々の靈魂を隨意に奪與する所の權力を有する者なり

五十九條　神若し人身より靈魂を奪ひ去る時は人生は死するより外有らざるなり。

六拾條　靈魂と人身の分離の人生に於て最も恐る可き者なれは常に靈魂をして人身を離れさる樣に神に祈らんとする念を生するは素より當然なり。

六拾一條　人生天壽あり我獨り永壽を欲すと雖神の自然は當抵是を許さるなり。強て是を神に求めて得らるべきやを思ふか如きは實に迷信の甚しき者なり。

六拾二條　死は靈魂と形躰との關係の分離なる事を悟れば必ず靈魂の不滅なる事をも知らざる可らざるなり。

六拾三條　人は死後の遺躰をも忽にせすして是か埋葬てふ者の懇切なる禮儀を用ゆる者又是か爲めなる可し。

第五章　神通の妙法

六拾四條　抑も自己の精心に神性を感受せんとを求むる者は自己の精

心に妄想雑念を斷ち八萬四千の煩腦を斷去する所の妙法を修養するを先務と爲すべし。

六拾五條　神道の眞境に入る時は誠の神を悟り悠々泰達精心明快を覺へ無病健全の身と成りて精心身偕に快感を覺へ悠々として春台に登るが如く誠に天眞爛熳の姿質を得るに到る可し蓋是が修養の先務と謂ふは神道悟道の活法を學ぶにあるなり。

神道悟道之活法

余は近年宗教の思想界に住み、既に十年の間、宗教家の修行の體を見聞するに、何れも一旦は宗教の本來に進み來ると雖、多くは徒に

定境を認めて、惺々暗々、遂に根據の寄る可き莫く、氣力澄み虛空一片にして疑ひ更に無しと謂ふ。觀し來れば皆是れ首より上は丁簡、有漏の分別にて、唯他を欺くのみならず、大に自己を味すなり。若又斯る輩に非ずんば徒に理に迷ひ、議論に滯り、あれか是かと探り廻る。宛も盲者の十字街路に徨ふが如し。斯輩皆是れ野外陣頭の番兵のみ。枝葉を摘み、枝根を尋ね、更に本幹に到らず。總べて實語に非ざるなり。看よ、僅に頭を廻せは素白の凡夫なり。唯夫れ一回なりとも、二回なりとも、彼を成し、是を爲す。是に於て始めて、迷ひが出るとも、悟りが出るとも、全べて心に頓着せず。下腹の裡に息を二六時中無々と

鎮む可し。斯の如く心を鎮むれば、妄想雜念、山の如く、又海の如くに集り來ると雖、更ら氷雪に熱湯を投するが如くに、いやとも一片乃涯になるなり。茲に於て、森羅萬象、競ひ來ると雖、面を吹いて寒からず、川柳の風必ず迷悟は他の作に非ず。我と心に悟り。我と心に迷ふなり。鳴子をば已が羽風に動かせて心に擾はぐ村雀哉。と古人も歌はれたり。皆斯の俚を出でざるなり。人々大風呂敷を負ひ。此處の善智者、彼處の學者、種々樣々に尋ね廻りて、拳を堅め、眼を瞋らし、漫に伎倆を弄して、善の惡の是の非と、徒に空事許りを繰り廻し、茅火の消ゆる如く、一生を暮すこそ。實に憐む可し。看よ志深き淵には

音も莫し、思稔せよ、戀の情の故郷の他郷のと一生習ひ覺ゆる底の起來る者をは、止めんと欲して中々に止め難く、止め樣と思ふ者は、止らすして、高ぶる妄想と相模とりして足實地を踏まず、十里飛脚の忙しさ、只一箇も本途は行かず。兎徑に遊び少節に拘はるなり。斯の如くに精魂を勞し却て名聞利難の懸橋となるなり。只二六時中なりとも靜默が鎮、直に兩眼は拔け、三百六拾の骨節、八万四千の毛髮は粉になるとも、只斯の無の字に朽ち入るか、通の志なり、謂所菩提心なり。一箇の無の字を鎮むるか神性の感受なり。修行なり。而して天地萬物を殺し、又殺し、殺して殺す所無き所に向つて、更に一殺して

虚空を喚起し、始めて我と我が手を拍つて快感を覺ゆるに到る。元來斯の如くなる事を決定すれは、是卽透關なり生死透脫なり、心身脫落なり。誠に境涯に達する悟道なり。抑も此道は文字を說かずして人々の天より受けたる天心を以て解脫する所の妙法なり。雖然、文字の貧める人は、文字に依り、卽心理哲學、靈魂學等を以て是に參究すれは、又一種の徑便なる可し。諸子、願くは、自己の幸福を受くるは自己の幸福なり。譬ひ余は如何に馬骨にせよ、牛骨にせよ、余が賤肉に賴らすして余が神に代り諸子に訓ゆる密言を實修せられよ。昔は張眞人なる者ありて、神通の妙法を得て天下を飛脚し以て社會の救濟を實行せら

れたりと謂ふ。是れ甚た怪なり奇なり世俗の學者多くは、是以て一種の珍談と止むるのみ。雖然、神通の妙法は、自己に實踐參究して初めて自心に確認するに到る可し。斯故に悟道に達する迄では世人の多くが將しく信せざる所なり。諸子、幸に斯の世に生る。蕊々として死す何そ牛馬に異ならん。故に朝に道を聞けは夕に死すとも可なりと實に我等の社會に於ける一種の大訓なり。諸子、請ふ。暫時く余の解說に反省して信仰の誠を盡さん事を。是れ余の本願なり。唯夫れ誠の月を觀るに到つて天眞爛熳、眞に眞個の神人たるを得らるゝなり是卽神通活法の修行に於て値する處なり。

血を賣らん杜鵑子

人は若くて神は春

胸を叩いて高くゆけ

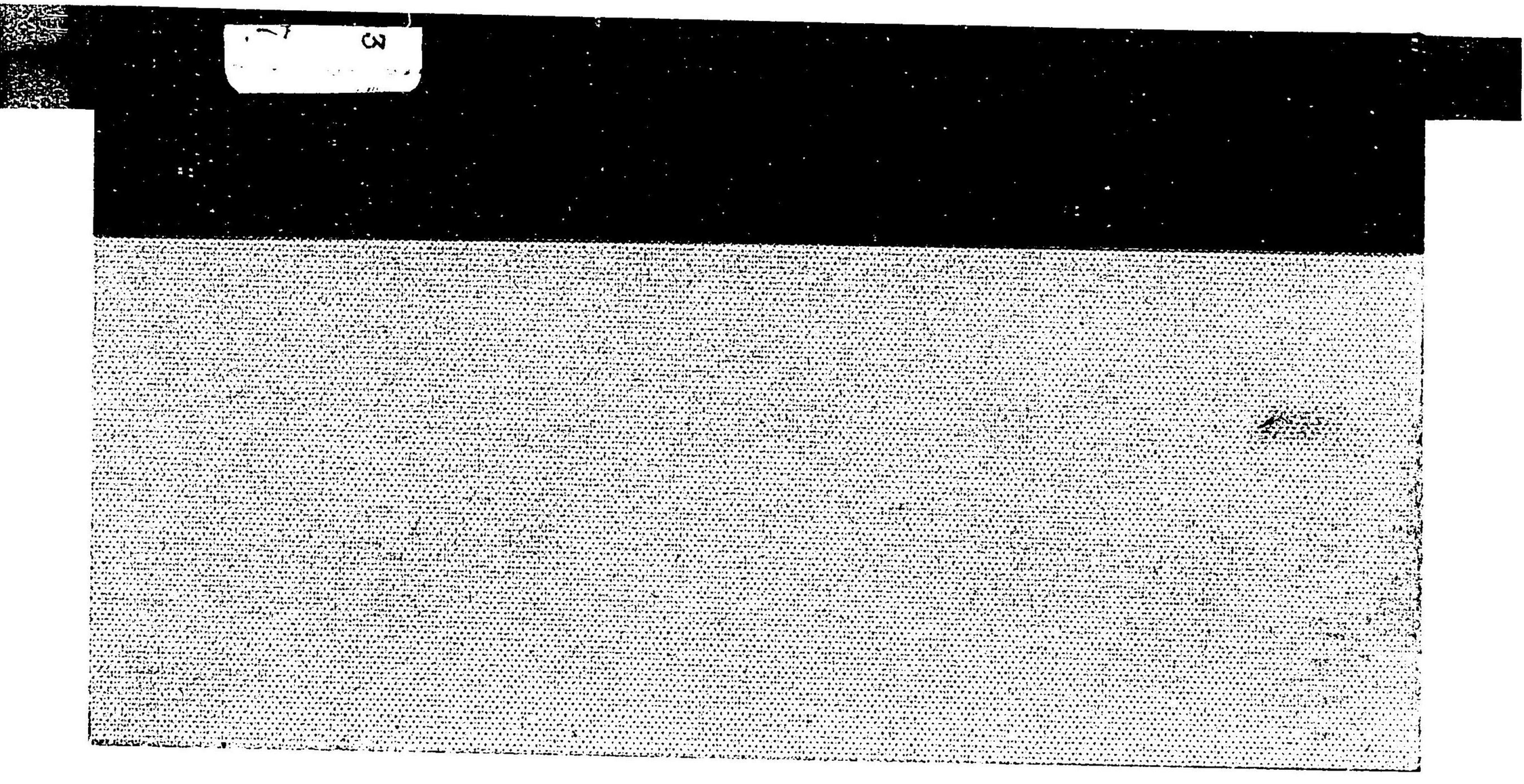
貴き者は神の道なり。

明治四十二年十月一日初版發行
明治四十二年十月二十五日印製
明治四十二年十月卅日再版發行

複製
不許

著作兼發行者　高知縣香美郡佐古村東佐古四十番地士族　佐々木清水

印刷者　愛媛縣松山市千舟町十四番地　日進社　高須賀久太郎

誤	正	誤	正
宣言未行中	中院ハ中浣	三十七沃しハ	三十條沃行ハ汚行し
五條三千ハ	三十		
二十條無盡還ハ	無盡に		

2B-50